人間・人生

第二野病
衛生軍曹　西富静夫

十一月十六日　どんより曇つた天候に雨を気遣ひながら青浦を後に昆山に向ひました
此の頃は　うち續く行軍に疲れて重たい足を引ずつて歩いてゐました
約四五里も歩いたかと思はれる処に来かかると　まるで夜店でもひつくりかへした様に　支那軍の大行李でもあるう種々雑多なものが道路一杯散乱して　長々と続いてゐました
此処まで来ると皆元気づき、折柄本降りになつた雨にうたれて雑然と転がつてゐる中から　支那兵の大切に持つてゐたものであろう新らしい傘など拾つてさしながら

オイ夜店から傘を買つて来たがどうだい
馬鹿に安くて六只だつたよ　おかげで濡れずに済むと
と冗談云つてゐる戦友もありました　此
處は歩兵第一大隊が　近回遮断に来た
當てない戦果を收めた　有名な三家村の戦
跡だそうで敗走した敵軍の狼狽振りが如実
に物語られてゐました
此の珍奇な風景を話題の中心に　次々と語
りはげみ　夢中で語り続けて行くうち何
時しか疲れも忘れて　夕刻林樹樓に着きま
した
林樹樓では此の辺一帯の戦斗に負傷した患
者が衛生隊に收容されて　病院到着を待つ
佗びてゐました
早速衛生隊と業務を交代して病院を開設す
る事となり　八里余の行軍に疲れた身体を
休める暇もなく　装具を放り出すと共に悉

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

者の引継　兵器裝具の整理　治療給養等々
全員目も廻る様に大多忙でした
特に給養に於ては糧秣が充分になく　患者
には本人の携帶食糧と我々衛院衛生兵の携
行食糧とで辛うじて給養出來ましたが　我
々は民家から徵發し來た玄米で聞設間を過
した程でした
その夜も深更となりどうやら全員で努力で
一段落つき　あり合せの寢台に疲のついた
まゝの稻を被り夜を明しました
翌日になつて昨夜暗の中に手探りで潛込ん
で休んだ寢台の下から　負傷した敗殘兵を
みつけて引出すなどの珍事があつて　後で
背中の冷つとするのを感じました
十七日も多忙の中に過ぎ　十八日に至れば
「師團全員引返スベシ」
との命に接し　患者を轉送しなければな
らず　當時の庶務主任蓋木中尉殿の交渉で
やつと崑山野戰病院に收容して貰ふ事になり　自動貨車に患者を搭載しておたら　丁度酒井旅團長閣下が徒步で引返して來られる途中でありました　通掛りに
「みんな良くやつてくれた　御苦勞であつた　早く立派に癒つてくれ」
と優しく言葉をかけて行かれました
患者一同齊しく感激し　我々も此の麗しい狀景に自覺の熱くなるを覺えました
やがて患者の搭載もうへて崑山に向ひました　途中道の悪い事とおまけに諸車輛が道一ぱいで思ふ様に前進出來ず　患者は寒氣と動搖に傷が痛むと訴へるし　氣が氣で目ありません
「患者だから道を開けてくれ」
と怒鳴り乍ら　三四時間もかゝつて漸く崑山病院に着き　やしくとほつとして發著部に行きました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

しかし、なんのかんの言って、格式張ってばかりゐて、何に進展しません、それでもどうにか長い時間を費しながらも患者だけは引渡しました

さて兵器装具引渡しになると「病院では兵器は受納しない」といふ、私達は「それでは困る、これは患者の携行兵器装具であって若し患者が退院でもする場合無いと患者自身も困るから是非受納して貰ひたい」と頼んで みたが駄目です 終には「患者丈を収容して患者の兵器を置放して受納しない法があるか」と喧嘩腰になって交渉しますが 頑として聞入れません

宵闇は増々迫って来ます

自動車の連中も「部隊が暑ると斯うまで不親切なものかな」とブツ〳〵言ってゐます

瀬に障って仕方がありませんが如何にも成りません

今度は昆山衛生隊に行って佐藤軍曹が事情を話し懇願してやっと受納して貰ふ事が出来ました 終った時は遅りは既に真暗になってゐました

余り手間取ったので我々一同バ中穏がならずブツ〳〵言って部隊の後を追ひました

途中道悪く 自動車の立往生すること幾度 その都度荷物を下して皆で後押しすると いふ状態で 三日の後やっと追付きました

惡路の患者護送

第二野病
衛生軍曹 迫田重盛

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

十一月十七日　我が野戦病院は前日夕刻樹樓到着早々衛生隊から傷病者百余名を引継ぎ収容することになり　早朝から目の廻る程の忙しさ　こんな忙しさは今迄にないやうに思はれました

先づ困つたのは家屋の少く又狭いことでした　患者を収容すれば殆んど入る所がなく己むなく部隊職員は半キロ位離れた部落に宿営し業務を遂行せねばならず却中不便です

患者の病室と言つても　只雨を凌ぐだけで粗末な土間であり勿論毛布等も携行してゐないので寒がる者も居ます　或者は戦友にでも附近から徴発して来て貰つたのでせうボロ〳〵の布團を被つて寒さを凌いでゐます　如何に戦争とは云へ此の有様には思はず涙が滲れるのでした

次に困つたのは糧秣です　職員はもとより患者でも南京米のボロ飯を一日二食で我慢せねばならぬ状況です　尚全食量も現地徴発のため贅沢など言ふ者は勿論ありません

十八日　引揚命令をうけ　病院も寸刻の余裕もなく午後から患者を前送せねばなりませんでした

患者は前線の○師団野戦病院に前送することになり　私もその患者護送の一員でした中ノ内衛生少佐殿以下六名だつたと思ひます　少尉殿の指揮の下に午後二時頃トラック三台に患者の分乗を終り出発しました

天候は前日に引続いて小雨日和です

出発に際し運転手は患者一同に対し

「道路が悪いから　多少動揺がひどいが辛抱してくれ」

と言ひましたが誰一人返事する者はありません　無理もないことです　床の上でさへ呻いてゐるのですから　傷の痛さを思ふと

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

自動車に揺られることが楽じられたことでせう

愈々出発――道は相当に悪く半キロも行くと激戦の跡生々しく　敵の遺棄死体も散知れず横はつてゐます　あたりは又一面の縦横に塹壕が掘られ　橋といふ橋は殆んど焼落され　我が工兵隊の作業に依り修理されてありました

患者は愈々苦痛を訴へる

自動車を止めてくれと言ふ者――歯噛をし乍ら我慢してゐる者――又泣いてゐる者さへあるので護送者の私達は気の毒でなりません　身を切られる思ひで患者を気遣ひ乍ら暫く行くと向ふから来る自動車に出逢つてしまいました

道が悪いので行きずりも却に容易でない　バ転し乍らやつと行き過ぎたと思ふ頃　先頭の車が泥濘の中にめりこんで　幾らエンジンをかけても無駄です　止むなく元気なものは下車して手傳ひ三台通過したのは三十分の後でした　気短かな患者が

「こつちは戦傷患者だぞ　貴様等が避けんからだ　馬鹿野郎」

と怒鳴つてゐる者もあり却々雰囲気が荒い

暫く行くと可成り良道路に出ましたので自動車を停車して貰ひ　患者の見廻りをつへ十分の後出発　崑山についた時は五時も過ぎてゐました

病院は本通りから五十米も離れてゐる立派な建物でありますいよ〳〵是から全患者を担送せねばならぬので　中内少尉殿は加勢を求むべく連絡に行かれましたが　多忙な為加勢も出来ぬとのことで　仕方なく急造担架四を借り受け夕刻遂やつと運び終つてしまいました

愈々任務を果し懐しい原隊に帰るのが何よ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

り嬉しかつた

夜になるにつけ雨は益々降り出して来ました　軍衣は盡く濡れ寒さは加はり　途中からは暗くなつた上に相当の荷物もありましたので　行きの時以上の苦痛がありました

幾度となく泥の中にありこみ　下車しては手傳い〳〵して隊に着いた時は戰友も皆泥だらけのびしよ濡になつてゐました

既に十二時半も過ぎてゐました

夜半なので戰友達は皆晝の疲れにぐつすり寢入つてゐます　起きてゐるのは衛兵と不寢番だけ――少しばかり焚火もありましたので火にあたつて寢に入つたのは一時も過ぎて居ました

戰友達は皆小兎のやうに藁の中にすや〳〵寢入つてゐます

先づ寢る前に食事をせねば　今朝食つたばかりなので腹はぺこ〳〵なつてゐます

マツタ活躍作戰　第一野戰衛生隊　赤池克己

マツタ活躍作戰　第一野戰衛生隊　赤池克己

マツタ活躍作戰　第一野戰衛生隊　赤池克己

のロープと釜が二個置いてある　何処から徵發して來たのか汁は豚汁がお來てゐる

表面には油が一杯白く詰つてゐました　支那味噌で煮詰に野戰荒料理です　飯は臭い南京米ではあつたが　実に美味しいご馳走でした

寒い所に冷飯を食つて悪寒さへ加はつて来ました　寒くて仕方がないので戰友の間に入り込み藁を頭から一ぱい被つて海老の様に二つに曲つて寢ましたが仲々温らない

一時間も經つてやつと温味を感じ何時寢入つたともなく眠つてしまいました

坑へるべき病態

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

十一月二十一日　松江でコレラ患者の看護に従事しました

杭州湾上陸以来金山崑山附近一帯の戦雲未だ鎮まらぬ頃　松江附近はコレラ患者続出との報に接し愈々任務を果す時が来たと思ひました

何分コレラといふ病気がどんな病状のものかも知りませんでしたが　一度これに罹れば殆んど助からぬものとばかり思つてゐました　第二半部が受持約二週間の予定でしたが治療看護に當ることになり　十一月二十一日午前九時から中村衛生伍長水吉衛生伍長外兵十五名は直ちに衛生隊から患者を引継ぎました

生れて初めてコレラ患者を見「アッ」とばかり驚きの声を発してしまいました

午前十一時頃　重症室に這入りました

中村といい小軍屈は　昨日入院したばかりなのに早や衰弱のため生命危篤と平野二等兵が報じて来た　私は診断中の軍医殿と一緒にかけつけ種々強心剤注射など施したが甲斐もなく遂に病魔のため惜しくも一命を奪はれてしまいました　田島軍医殿始め我々衛生兵一同非常に残念がりました

軍医殿は毎日のやうに「消毒を厳重にやれば絶対に感染する事はない」と注意されます患者は日々増加するばかり「必ず死なすな」と軍医殿はじめ全員一心同体となつて看護に全力を注ぎました　その結果約二百名の患者中五六名の死亡者を出した外すべて快方に向ひ来るのを見る嬉しさ亦格別でした

嘔吐する者・下痢をする者　看護をするのも寸時なりといふ有様で　何よりも衰弱の早さに驚きました　これでコレラの種々の症状も確認し　又看護者から一名の罹患者も出さなかつた事は何物にも勝る喜びでした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

患者二百八十名中約三十名が「コレラ」患者でありまして　私はその「コレラ」患者病棟附として勤務しました　内地で話には聞いたこともあり　又現役時代看護教程で症状等は知つておましたものゝ　直面して見ると何だか恐しくて　最初の中は飯も食へない位でした

北支で赤痢は取扱つて来ましたが　今度は吐物と言ひ下痢と言ひ激しいこと〳〵よくもあんなに腹の中に入つてゐるものだと思ひました

夜ひるの差別なく　注射や食餌　大小便の世話　交代等目も廻る様な忙しさでしたが一向苦にならず　夜も短いとは感じませんでした

然し一番困つたのは湯茶の補給と吐物及便の処置でした　湯茶の補給は民家の釜を徴発して来たものゝ　苦力は居らず　井戸は遠く　衛生兵とても　病室から手がはなされないし　やむを得ず小行李に頼んで　苦力を徴発してもらひ　大いに助かりました

吐物及大便は　容器の無いのに困りました　何しろ下痢をするかと思ふと　嘔吐があるといふ風で　しかも之が三十人も居ますので　時には間に合はぬこともありました

なかでも　衛生隊の某軍曹の下痢は激しく殆ど引切なしであつた為め　民家から水甕を徴発して来て　寝台の下に置き　之を便所代りにし　寝台のお尻の当るところに孔をあけて　ねたまゝ用を足すやうにしました　無慈悲の様で　まことに気の毒でなりませんでした

つはものゝ病やゝよしきり〳〵す　正作

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

連絡も食料もなく

第一野病　　山野衛生軍曹

上海上陸後　私は残置物品監視の長として上海埠頭に荷物を集積したまゝ　荷物の中に起居して居たのでありますが　数日は過ぎて行くうちに食料（副食）はなくなるし　薪もなく　それでも最初の内は購入して何とかして居ましたが　愈々困ったときが来ました　部隊からは何の連絡もなし　又部隊も前進中で連絡どころのことではない筈と思ひつゝも　部隊を跨て　食料の欠乏程さびしいものはありません　どうしてもしかたがない時は　他部隊の監視者から貰へたりして　どうかかうか生きながらへて居ました

其の折　碇泊場司令部の佐藤大尉殿が来られた為　實状をお話したところ　非常に同情され　翌日早速多数の苦力を自動車で廻してくれたので　碇泊場附近の家屋内に移轉起居することが出来るやうになり　食糧も兵站から不自由なく貰へる様になり　助かりました　佐藤大尉殿の御恩は忘れません　今考へると　なぜ早く兵站に連絡しなかつたものか　その頃の自分が情なくなります

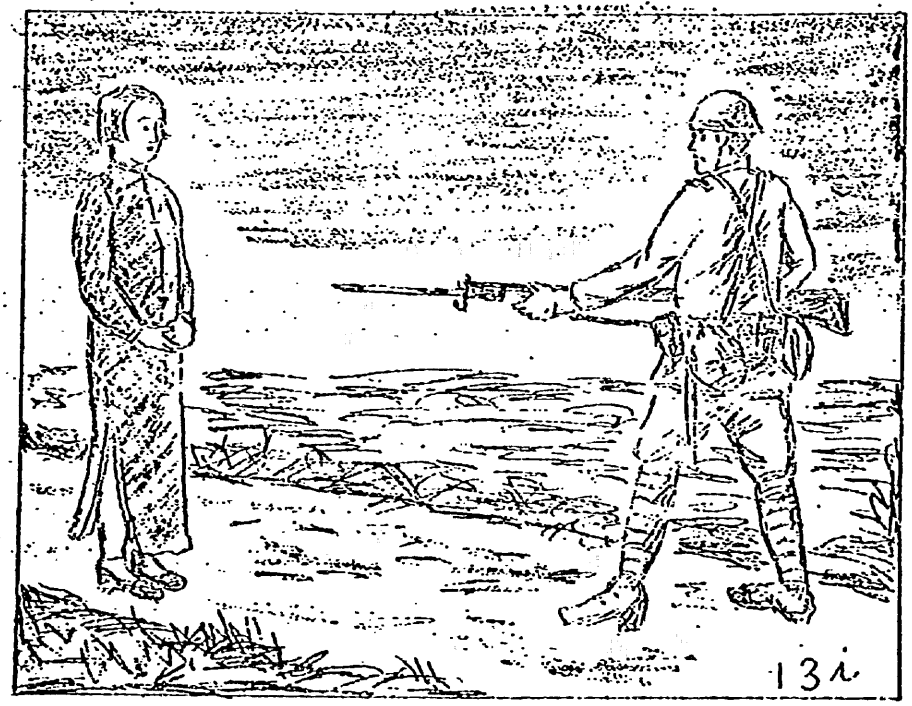
× × ×

戦の跡薪條とじぐれかな　　正作

ふり変ぐ時雨や軍馬埋わやらず

進軍の名残り目にしむ時雨かな

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



目次

1 停林鎮附近の泥濘　日ノ本部　竹原上等兵
2 假裝行列　日ノ本部　甲斐上等兵
3 泥の中を行く　六ーA　肥川上等兵
4 唐子浜で捕へた姑娘　一二　栗原曹長
5 水牛はこりごり　一〇　高野伍長
6 金山を出て　日ノ本部　野口伍長
7 紅塗の木壺　日ノ本部　中無田栗曹

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

停林鎮附近の泥濘

歩一三　Ⅲノ本部
輜重兵上等兵　竹原安熊

江南の空に秋更けて　折柄の霖雨は一代の盲將蔣介石の涙雨とも思はれました
荒山を陣し上海戰果も我皇軍のものとなる頃　杭州灣に敵前上陸して數日　十一月十五日金山衛城を出發した我糧秣輸送隊にも苦闘の幾日かゞ続きました
野も田畑も一面泥海と化し　膝を没し足を運ぶにも　大きな努力を要しました　戰友そうです我等の戰友と言へば愛馬ですが愛馬こそ切つても切れない關係にあるのですが　その愛馬でさえこの泥濘には相当傷めつけられ　その疲勞も目に見えて來ました

自分の馬は不幸にも上陸以來足を痛めてゐたので　仲々前進も思ふように行きません　この時程強健な軍馬の有難さを感じたことはありません
人も馬も泥まみれになつて　一生懸命になつて行きますが　前から段々遅れて二千も三千も引離されてしまひました　或る馬など此の泥に倒れたまゝ　遂に起き上がれめのもあります
自分はこんなことでもなつてはと思ひ　補助兵の松永　尾上　坂田の三君に後押して貰つて　漸く百米ばかり進みましたが　又動けぬ様になつてしまひました　それで後備のやはり北支以來　咽喉部と膀部を痛めてゐる　馬を付けて二頭引きましたが　どうやらこうやら追及して行きました
間もなく秋の釣瓶落しの日が暮れて　宿營することになりました　早速馬の手入して

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

焚火のそばで我衣乾かしに取掛りましたが
泥だらけの服は仲々乾かず　明朝出発の
準備をすまして　寢に就く頃はもう十二時
過ぎてゐました　翌朝歩哨の大きいバスの
起床の声に飛んで出て見ると　相変らずシ
ト〳〵と降つてゐます
未だ明けやらぬうちに馬裝を整へ　今日の
行軍に事故のない様に充分準備して　さて
辺りを見廻して見ると　〝ホウ　誰を見ても
今日の服裝は変だなあ　申合せた様に　全
く假裝行列でもやる様だ〟　と驚いてしま
ひました
それは毎日の泥行軍で我衣の汚れが仲々取
れぬ為め　支那服を着て見たり或は全然我
衣は着らずにゐたりするのです
自分も多少寒くはありましたが　衣袴を脱
いで襦袢袴下の上に巻脚班を着けて出発し
ました

今日も二頭引です　朝の内だからでせう
未だ皆元気に前について行きます
「おい　今上　今日は又莫迦に元気が良え
ぢやないか」
「当り前だい　昨夜俺は寢ずの番で　馬を
飼付たんでエーーーー　ね馬さん　しっかり
頼みますせ」
「アハハハハ　そうか　すんませんね」
最初の内は皆元気旺盛でしたが　遂には又
止り始めました　兵隊は慰め叱咤して声を
からしながら頑張つてゐます　本当にそう
です　馬でなくして兵隊が頑張るのです
ラッパの坂田が一彼は鼻で喇叭の伴奏をや
るので　こんな綽名がついてゐるのです一
一生懸命です
「おい　こらッ行かんか　何んだこのぐら
い　チエッ　よいしょ頑張れ」
馬の吐く息は火の様です　泥に埋つた車輛

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

はが〻〳〵動くだけです　今度は哀願して居ります

「ね　頼む　曳いてくれよ　夜はなあ　樽山食はせるぞ　さあ頑張れ」

「おい坂田　大分参ったごたるなあ　待て〳〵慰撫すら」

「さあ　ほらっ　やあ行った〳〵」

十歩ばかりで又止りました

「あゝ　仕様がなか」

「どうだらう　荷を下さうか」

「さうだなあ　ようし」

と部しかゝつてゐる時　先頭より増尾の馬が慰撫に来ました　大行李長殿も来られました

「こらっ　無断で部しちやいかん　増尾の馬で曳いて行け　早く準備せ」

「はい」

堅く荷縄を締めて増尾の馬で引出しました

仲々調子よく行きます　補助兵でさえもこについて行けず　自分の馬も後からぼつぼつ行きます　お蔭でやつと前進出来た　停林鎮に到着しました

此處で宿営することになりました　翌日は道路修理の為め休養しました　此の日も相変らず雨は降り　風は頬を刺す様な痛みを覚えます　こんな悪天候下に　部隊は一部を残置して道路修理に出掛けました

余り寒いので西郷隆盛の「孤軍奮闘」を吟じたりしました　それに和するように先頭の方で

「何処まで續くぬかるみぞ――――」

と討匪行の歌が聞えて来ます　全く真に迫つてゐます　全で自分等がその主人公みたいな気持ちです

こんな歌も内地では単なる歌にしか過ぎんが　今俺達がこの様な場合に遭遇してみ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

と　始めて此唄の氣持ちが解るのう」
「うん全く　聞いてゐるとこう身がわくわくするごたる」
寒氣と泥濘と聞つて修理したが　材料不足の為め思ふ樣に出來ませんでした　歸つて見れば久し振りに鷄のスープです　湯氣がポツ〳〵立つて食慾をそゝります　殘留者の心盡しです　其の頃はうろ覺えの支那語で
「天好々々」
「謝々」
と　連發です　誰かゞ自分に
「おい　竹原何杯目かい？」
「俺かい　三杯目だよ」
「馬鹿者が　そんならそれでしまひだぞ」
「まあ　一杯食ふ」
「出來ん〳〵」
「兎に角賴む」

みんなが
「此奴　とても心臓強いぞ　まるでトウチカだぞ」と言ひます
「トウチカでもいゝ　折角の珍味が美味ふないぞ」
で　皆　ウハハ……と大爆笑です
班長殿が
「大概で止めんか　馬鹿顔が食ひ辛抜ばかり揃ふとる」
これで又大哄笑の渦巻きです
其の夜一班の宮永と車輛勤務の為め　夕食後道路横の小さな家に來て　焚火で身体を溫めつゝ襦袢　軍靴　卷脚絆と言つた順に乾かしてゐました
程良く身体も溫り假眠所でもと思つて　準備に取掛らうと立上つた瞬間　家がミシツと鳴りました
「おい宮永　危いぞ」

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「ばつて居い家の倒れるこたア なからうと思ふ」

「さあ」

と話してゐたら突然大きな音と共に 瓦が落ちて来たので その儘ハツと飛び出しました それを待つてゐたやうに 一度に砲弾の落下したやうな物凄い音響と 土煙り を立て、家は崩れてしまひました

後は眞暗です 忘れものを見付まうと思つも手が付けられません 隣りの歩兵の宿舎に行つて 交代で車輛の監視に当りました

長い夜も明けて 早速二人は掘出しに掛りました 一時間位して漸く軍靴と巻脚絆の片方だけ出て 後はいくら掘つても出ません 其のうち部隊は出発準備にかゝつたので

「もう靴だけでん出たけんよかばい」

と諦めて自分も準備にかゝりました

一方は白い布で一方は巻脚絆です 変な恰好ですが我慢しました 早速自分の恰好を見付けて

「竹原 どうしたかい」

「はあ 家が壊れて下敷になり見つかりません 私達が無事ですけんよいです」

「うんそうか 危かつたね 困つたなあ 時間があれば皆で探すが切迫しとるけん仕様なかたい」

「はい 我慢して行きます」

と出発しました

一昨日の様な泥濘の中を――――。

假裝行軍

歩一三ノ 五ノ本部

輜重兵上等兵 甲斐孝道

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

私達車輛部隊は三日遅れて上陸しましたが
金山衛を出発したのは十八日でした
何しろ物凄い泥濘の道です　膝までもぬかる様な泥道を行くのですが　馬は倒れ兵隊は轉び　もう惨々の体たらくでした
毎日宿舎に着いてから軍袴や巻脚絆を洗ひ焚火で乾かしておましたが　毎日の行軍で然も粘氣のある泥土です　疲れが甚しいので一分でも睡眠をとることにしました　それには宿舎に着くと　直ぐ支那人の着物を徴発するのです　巻脚絆の代用には襁褓布れを足に巻きつけました
軍医殿の様な眞白い着物や　姑娘の着る様な赤青紫色とりどりです　軍衣袴は車輛に結びつけてあります　そしてもの〻一町も行かない内に　今迄の綺麗な着物は　忽ちのうちに泥だらけになってしまひました
宿舎に着けば馬の手入をすませ　飼付した後着物探しです　今日着て来た着物は捨ていしまひます
こう云ふ風に変な假装行列して前進しましたが　寫眞でも撮ってゐたら　良い記念になったらうと思ひます

泥中を行く

歩一三ノ RIA
歩兵上等兵　肥川壽

敵前上陸以來降り出した雨は　私達残留者が出発するまで続きました　私共の前進する道は　道であって道でなく　土であって土でないのです　一歩々々と正規の巾では とても歩けません　二三百米向ふの家屋まで實に一日かゝって行く程です
途中敵が出ても私達を発見するのは　困難

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

ぢやないかと思ひました　それ程泥をかぶつてゐるのです　所謂泥のカムフラージュです　勿論飲む様な水とてありません　まるで水飴の様にどろりとしてゐます　やがては麺麭も絶えてしまつて　野菜があれば野菜を　豚が居れば豚を飯として本隊に追及したのです

私共が本隊に合したのは　一九〇〇か二〇〇〇かと思ひますが　久し振りに戰友と顔を見合せて　言葉も出らず思はず目頭が熱くなりました

夜とは言へ隊長殿も出て來られて

「懸命にやつてくれてこれで安心した」

と言はれたのには　今までの疲勞も一ぺんにけしとんでしまひました

唐子浜で捕へた姑娘

歩一三ノ一一　歩兵曹長　栗原定義

日軍百萬上陸のアドバルンが改地の様な感じのする空に揚げられて　先づ敵膽を寒からしめてから二日目　雨にたゝかれぐいぐいと肩に喰ひこむ裝具に喘ぎ　泥濘に膝を没し倒れたりして　泥人形よろしく金山衝を通り唐子浜で露營することになりました

私は半張りの脱れかゝつた軍靴を　どたばた言はせつゝ　道路の警戒を命ぜられ部落の端に行き　何か言ひたそうな兵隊の顔を無視して　態と命令的に警戒區畫を定めて居た　實は私も泣き度い位でした

其の時のことです　特に監視すべき向方は

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

此の方向と道路上を指すと　指したところに忽然と姑娘が現はれて　窮窕たる姿態が楚々として　此の方に來るぢやありませんか

誰だつて面喰ひます　附近は敗殘兵も正規軍もうよ〳〵してゐる　そこを敵の方から來るんです

「此奴てつきり〇〇〇だ」

素早く匿暑を済まし　泥人形は遮蔽には持つて來いと伏せて居りました　身近に來て兼ねて手筈の通り　私が一人立ち上つて通せんぼうをして誰何しますと　一寸たじろいだ風でしたが

「日本の兵隊さんね」

流暢な日本語なんです　又面喰つた　兵隊もそろ〳〵集つて來る　新めて面を見ると歳の頃二十七八　戰禍に災されたかか心持蒼れてはゐるが　明眸皓齒の部類に編入される代物なのです

聞いて見ると　上海から逃げて來たけれど皆殺されたりはぐれたりして　之は支那軍の方に居ると危いと思ひやつて來たと言ふ

「日本語は何處で覺へた」

と聞くと

「長崎に四年　活水女學校を卒業して上海の日本人書店に雇はれて居た」

と言ひます

何はともあれ先づこれへと　久し振りに柔い日本語を聞いた感傷も手傳つて　中隊長殿のところに連れて行きました

色々調べられるけれども臭いところはないらしい　丁度中隊に通譯が居なくて　何かと不自由してゐたこととて　通譯がはりに使ふことにしましたが　炊事をさせると曰本人の味の好を心得て　でなところを見せ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

る　世帯馴してゐるから兵隊に程よく愛嬌をふりまく　姉さん　おツ母さん　婆さん　好みの愛稱をつけて　皆で大切にしたものです

時には宵待草や荒城の月を聞かせてくれました　毎日の行軍も宿營もたのしみでした

和氣藹々として夕方の園樂の紅一點　和やかなものです

然し相手は柳腰の支那女性　南京へ南京への猛進擊に　吾々に伍して行ける筈がない

中隊長殿が見かねて上海の方へ歸されたが　其の日の行軍のけだるいこと　道の遠いこと　足の重いこと　皆考へこんで仕舞ってゐました

昨日迄は中隊の先頭に颯爽たる　颯爽と秋風に吹かれながら中支の曠野を馳つて居た

「おいきついなあ」

「うん」

返事も上ずべり　誰かゞ思ひ出し風に

「変なこと　言ひつこなしよ　皆兄弟ぢやないか」

と彼女の口真似をすれば　どたんに爆笑が湧くが　又元のむつちりした重苦しい空氣に歸る　それに堪りかねた兵が

「宵待草のやるせなさ」

彼の女の得意の歌だ

翌日からは又もとの何もなかつた樣になつて　一路南京へと殆んど小走りで行しました

陣中の紅一點　あの日あの時のことどもが　未だに思ひ出に殘つてゐます

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

水牛はこり〳〵

歩一三ノ一〇　高野伍長

杭州湾に上陸してからと言ふものは　来る日も来る日もクリークと田の中　おまけに雨は降る道はぬかる　肩に喰ひこむ背嚢の重さは加はる　唯〻何糞ッ〻と言ふ九州男子の意氣で頑張りました

其の時は色々な品物を持たされました　大隊砲弾　水上発煙筒　竹のブイ　弾迫は没収法子としても　大事に水上発煙筒や　ブイ迄持つて追畜することです　それで自分が分隊長殿に

「水上発煙筒とブイを捨てませう」

と言ひますと

「俺に聞く奴があるか」

とやはり隊長の答へ　ところで捨て　捨てとは言はれませんが　結局其夜　今村一等兵が纏めてクリークに残置しましたが　今も笑ひ話になるんですけど　足を滑らしてクリークに墜ち込み大騒動しました

翌日はこれぢやいかんと水牛を徴発し　台湾兵の経験者が馭兵よろしく行軍を続けたのはよい思ひ付きと　有頂天になつて鼻唄まじりで行軍したもの、　晩暗くなつてから金山に入る手前の橋にさしかゝつて　奴さんどうしても橋を渡りません

仕方がないので鼻綱を長くして　水を渡らすべくしたものゝ　畜生の浅間しさ一刹を爭ふ吾々を尻目に　我が家に帰つたつもりで悠々と游ぎ廻つてゐるのです

「アッ」と言ふ間もありません　載せた品物は水浸りになるし　部隊には遅れる　火をつけるやら石を投げるやら　おいで〳〵

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

するやら あの手この手にしくじつて意圖を放棄して 濡れた荷物を背負ふて ぬば玉の夜露をじゝくと歩き やつとで部隊に追及しましたが あれ以來水牛はこりこりです

金山を出て

歩一三ノ三本部

歩兵伍長 野口凡夫

金山を出でて街下の黄浦江支流を 支那民船にて渡河を完了したのは 今にも泣き出しそうな晩秋の空が 既に夜の帳りを下さんとしてゐる頃でありました

何分民船は僅かで数千の軍を渡すには相当の時間がかゝります 早く渡河した部隊は

夕闇迫る河辺で焚火もなく 全身が凝々でしまふ位い武者振の連発をしながら 只黙々と後続部隊の渡河を見守つてゐます

空は如時しか雨を催し流の早い黄浦の濁流に混つて押し流されてゐます

やがて戦禍に炎上する金山を後にして 雨中の悪路を黄浦に沿つて 粛々と軍を進めました 然し部隊全般の状況を知らない限り 今部隊の先頭か後尾か それとも中間か全々判りません 唯前を行く戦友を目標に 非常に緊張しながらついて行きます

それも余程緊張してゐないと滑つて前進出来ません

全身異状な緊張を漲らし 特に目と足には生れて以來の神経を集中して事に当りました それでも自分も戦友も時折ぼすりと尻を着きます 其の度に数へる譯ぢやありませんが 戦友の倒れた時など

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

「又か」

と自分の滑る苦るしさも瞬間忘れて噴き出したくなり　闇の中でにやりと顔をくづします

日頃でさえ悪らしい凹凸の支那の道路は降雨繁き上に数千の軍馬の足跡で凹凸は益々はげしくなつております　金山より既に四粁過ぎたと思はれる頃ですが　燃盛る焔火で直ぐ前の戰友宮島上等兵の肩から上がほのかにぼつと見えます

人が歩いてゐない余の道が焔火に照らしだされてぼんやり白く見えます　何んだか歩きまさそうです　所が如何にも人の歩いてゐるところより凹凸こそ少いが　滑ることは以上です　どつちを歩いても滑るのですが　人の歩いてゐるところは踏張りの利く所が出來てゐてよいようです

幾度か尻を着きますが坐つてしまへば落着き[illegible]ますはれど　心から落着いてゐる譯は行きません　後からもどん〳〵やつて來ますので　全身泥塗れになつて

「エイッ　畜生」

と起き上る時に怒りながら　又默々として少し遅れてゐる宮島上等兵の後を　何回も躊躇ながら追及しました

自分より後のことは全く判りませんが宮島上等兵が

「バチャ〳〵　ボスリ」

とやるのはよく分ります　其の度に自分も一寸停止させられます　お豆様です　よく見れば宮島上等兵が左手に　鉄兜位の丸いものを提げてゐます　それが尻さつく度によく見えるのです　其の度に

「何んだらう」

と考へてゐましたが　如何にも重さうたので遂可愛想になり〳〵宮島が又滑つた機會を

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

利用して
「俺が持つてやらう」
と手を出すと
「重いぞ」
一言して離しました　持つて見ると仲々重いのです　好奇心から受取はしたものゝばかに重く然もれい嚢です　持ちにくいと言つたらありません
「こりや何んだい」
「砂糖だよ」
と言ひます　金山からでも失敬して来たのでせう　今こんな時食つたら美味からうと思つて見たりしたが　矢張り重いです
銃持つた右手で嚢の口をそつと緩めて見ましたが　厚布でしつかり結んでありました
軽い落膽を感じて　今更自分から引受けて重いからと言つて返す譯にもゆかず　ヨチ〳〵の其の時としては大きな負擔でした

幾度か腹立になり　風を搖へ　或は中一米に足らぬ無茶に高い三角橋に膽を冷やしたりしました　闇の中を辷々と危険そうな木橋に差かゝりました
一名宛距離をおいて渡つてゐるのですが　下から其の高い橋を渡る一名〳〵を眺めてゐると　自分より二三名先の戰友が　勿論誰だか判りませんが　背嚢へ對空板か第一線表示旗でも着けてゐるのでせう　ボーンと白く見えてゐるのが二三歩橋を踏みかけたと思ふと　グルリドブン　ビクリークに落ち込みました
ホだ上り始めて四五尺の高さではありましたが　連日の降雨で水量は多い筈です
落ちた戰友のバチヤ〳〵水を掻く音と　誰かゞ岸から引張つてゐる氣配です　あの男の二の舞をやるまいと　それこそ頭から足先まで全神經を尖らして　手摺を傳りまし

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

た　こういふ風に幸運の果宿営地に到着
直ちに飯盒炊事にかゝりましたが　副食物
がありません
この時だ〃とばかり　宮島の持つて来た
砂糖を思ひ出し　夕食のお菜にしました
そして焚火の許に集つて泥濘の服を乾しな
がら　又兵隊特有の法螺が乱れ飛び始めま
した　こゝで自分がひよつと思ひ出して先
刻のクリークに落ちた一件を出すと　傍は
ちに居た山下荒次郎上等兵が
「あんまり言ふな」
と言つたので　正体が明るみに出て皆どつ
と笑ひました

紅塗の木壺

歩一三ノ四本部
歩兵等曹　中無田制以智

まだ忘れもしません　何時も思ひ出す度に
一人で噴き出すことなのですが……　それ
は霧雨と泥濘に全く泥人形となつて　青浦
城を占領した時の事であります
まだ城内からは敵の逃げ射つ迫撃砲弾が
グワン〈　落ちておました　然し連日連
夜のビショ濡れと二日間殆んど食なしとき
てゐるので　迫撃砲のお見舞もお構ひなし
に　各隊とも三ヶ所の炊事に夢中でした
大隊本部でも始めた様です　殊に植木鉢上
等兵の飯炊きは　何時もながら手早いこと
をやります〃植木鉢〃とは変つてゐますが
實は本姓山下と言ひます　何時も植木鉢大
の茶碗でペロリと平らげるので　植木鉢上
等兵の渾名を辱ふしてゐる譯です
それと反対に　宮原副官殿の当番野口上等
兵ときたら　何時も出発に間に合はめと言
ふ程のゆつくり屋でした　所がどうしたの

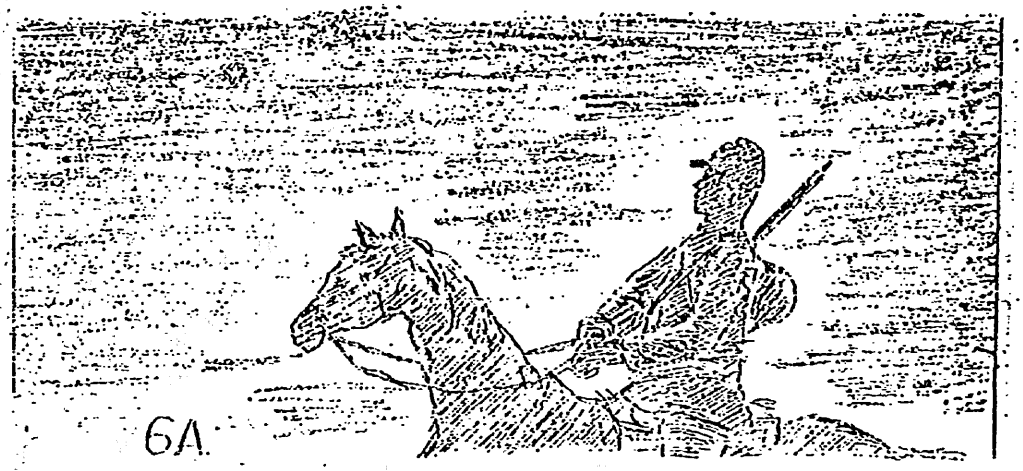
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

か今日はさも得意そうに　立派な紅塗の木
蓋にクリークの水を一杯汲んで来ました
「おや　今日は一寸手廻しが良いな」
と思つておますと
「おい中無田　一寸俺もかてんかい　そん
かばり水は使ふたちやよかけん」
と言ひます　丁度咽喉の乾ききつておた自
分は一もニもなく承知して
〃では一杯飲んでやれ〃
と飯盒の蓋を差出しました
するとその時命令下達を終つて　ひよつこ
りやつて来られた宮原副官殿が　この綺麗
な木蓋に目が止まられたのか
「おい　それは何にするんだ」
「はい」
当番野口上等兵は得意然として
「これは今から副官殿の飯びつにします」
と　副官殿は何時もの様に

「あゝそうか」
と言つてニツコリされるかと思つたら　大
喝一声
「馬鹿野郎ツ　そりや便器ぢやないか」
と大目玉を喰ひました
その時の野口上等兵の恰好　それよりも
〃では一杯〃と飯盒の蓋を差し出しておた
自分の手つき　附近に居た五六名の僧侶が
おかしさを耐えきれず　空腹を抱えてどつ
と大笑ひしてしまひました
實際穴でもあれば入り度い氣持ちでした
後に半端支那語で捕虜に訊ねて見ましたが
矢張り便器でした　全く笑ふ術無しでした

× × ×

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



金山衛から

松蔭鎮附近の難行軍

野砲六ノ三　砲兵軍曹　東宮盛

杭州湾に上陸するとすぐ夜間行軍で金山衛迄來ました

そこで中隊の重車輛

觀測車　予備品車二個

車輛は聯隊と一緒に行軍すること

になり　私共は中隊より一日遅れて金山衛を出発しました

道路は非常に悪く長林鎮から三粁位離れた處に露営してゐますと　ポツリ〳〵降り出した雨は　やがて沛然たる雨となりました　翌日も雨は益々降り募るばかりです

その上新設の道路は悪くなるばかり　人馬共に困難しつゝ午後四時頃漸く長林鎮に到着しました

その翌日も早朝から行軍しましたが　雨は依然として止まず行軍は全く不可能となりました　長林鎮から一粁位進んだ時でした

0202

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

車輛がめりこんで動かず　馬は倒れどうすることも出來ませんので車輛は其処に残して人馬は長林鎮に引上げました

明くる日も前日に変りなく雨は降り続いて徒歩部隊の行軍は絶間なく　道路は愈々悪化する一方です　そこで最後の手段として松蔭鎮に向ひ人力を以つて積載品の運搬に取り掛りました

其の間　馬匹の疲労恢復に努め　五日間で漸く運搬し終りました

その翌日は車輛運搬でした

空車輛に七八聯つけても動かず　只途方に暮れるばかりでした

長林鎮を出発し始めてから九日目　フトした考へから　車輛を本道より田圃に引込みそこを行軍したのですが　本道より案外軽々と　その日二個車輛共無事に　松蔭鎮に到着しました

愛馬もみるからにやつれ　泥に塗れて見る影もない有様でした　蹄鉄のついた馬は一頭もなく　そして中隊の二個車輛には蹄鉄工務兵もついて居らず　爾後の行動が思はれました

その時の指揮官井上准尉殿に事情を述べて工務兵を頼み　一〇日目に装蹄を実施しましたが　その時の嬉しさは　何とも例へ様の無い程でした

現在でもあの時の苦労がまざ〳〵と手に取るやうに浮んで來ます　そして一一日目に南京目指して　中隊急追の行軍となつたのであります

暗夜の單騎連絡

野砲六十五聯隊　砲兵軍曹　笠原直次

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

奇襲的に杭州灣敵前上陸に成功し　上海戰線の背後を衝くべく猛進を開始し　十一月十三日金山衛城に入城致しました

然ふ暇もなく直ちに嘉興に向ひ前進しましたが　道路は旬余に亘る降雨のため極度の泥濘となり　一歩足を踏入れば馬は腹迄達する様にぬかり　漸く難路を突破して二三〇〇頃一寒村に到着してみれば　戰砲隊は已に出発した後でした

速カニ張堰鎮ニ向ヒ追及スベシ

との大隊命令を受け　二回〇〇出発しました

北支と異り南船北馬の文字通り　各所に滿々と水をたゝへたクリークが　網を張つたやうに縱横に走つてゐます　その上橋梁は不備でこれを通過する事は非常に困難であります

先行車輛が通過しやうとすると　連日の難行軍に疲れ果てた馬は「アッ」といふ間に車輛諸共　深いクリークの中に墜落　彈薬車は影も見へず馬は首だけ出して苦しそうに呻いてゐます

段列長高橋少尉殿　小隊長藤本准尉殿の命も待たず　霰霙、れ山、長井の三上等兵は素裸となつて水中に飛込みました

続いて七、八名　――　彈薬車、馬匹の引揚げに努力しました

夜明迄回復の見込なしとみられた段列長殿は私に　張堰鎮の大隊本部迄連絡に行くやうに命ぜられました

地圖に依れば　この水から北方二粁余りに當ります

私は單騎　眞暗い道路を北へ　北へと進みました　約二粁も來ましたが燈火一つ見へず　人家さへない田圃の中です　フト空を仰ぐと　北斗七星は左方に見へてゐます

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

私は東へ進んでゐたのでした
小銃弾の音が身辺に聞へ始めました　敵中
には入りこんだ様です
銃声に驚いたか愛馬乙男号は高く嘶き、その
声は夜風にのつて　敵方に流れて行きます
私はそれが恰も敵を呼ぶかの様に感じられ
て　あわてゝ手を馬の口に當てましたが
馬は私の意を解せず益々高く嘶きます
私はこゝで戦死するのだと決心しました
運を天に任せて進む事三〇〇　三又路に出
ましたが　どちらに進めば良いか分らず轍
や馬蹄の跡で新旧を判断したり　車輛の幅
員等を細心に研究したりするけれど　心落
着かず　迷つた末半信半疑のまゝ意を決し
て右の方に進みました
時計をみれば〇二〇〇　もう復命の時刻だ
けれど進路は依然として不明……
併し任務は果さなければならない　尚前進
を続ける事五〇〇米――と
前方に言葉はハッきりしないが　三・四人の
話声が聞へます
「敵だ」
私はすぐ下馬し、馬を田圃の草に繋ぎ、私
は死斗を試み様と　路傍の溝の中に身をか
くし拳銃に装填しようとしたが緊張に武者
震ひして不覚にも二発を取落し　漸く三発
填めた時は　足音は五十米前方に聞へます
耳をすまして良く聞けば軍靴の音です
（友軍らしい）
半ばホッとしましたが眞の闇です　私は息
を殺して近づくのを待ちました
だん〳〵近づいてそれが友軍歩兵である事
がわかり嬉しさのあまり　すぐ声掛りやう
としましたが　今言葉を掛けると相手も吃
驚するだろうと考へ　五〇米程行き過ぎた
頃　呼止めますと歩兵も驚きましたが　そ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

水に依り　大隊本部の位置を聞き　〇三三〇　やつと目的を達成することが出來　すぐ引返して復命を終りましたが　段列長殿以下非常に喜こんで下さいました

その時は未だ彈薬車の引揚げ作業は終らず〇六〇〇皆の協同作業により揚げることが出來ました

二里の道程を八日かゝつて

野砲六ノ二　砲兵上等兵　岩本信吾

十一月五日　杭州湾に上陸した我部隊は一路南京目指して急追撃に移りました

戰火に荒れ果てた曠野は何処迄も続き　戎等軍輜部隊の通るべき道はなく　私達は本隊(先発隊)の出発に遅れること五日　金山衛を出発して本隊に追及しました

降り続く豪雨を冒して泥濘と闘ひ　外套も軍服も泥と汗にびつしよりに濡れ　十一月の寒風は身も凍るばかりです

焚くべき薪もなく　憩るべき家もなく飢と寒さを田地に過した三夜――

斯くして僅か五里の道を三日間かゝつて亭林鎮に着いた時の嬉しさは例へ様もありませんでした

私達は馬の手入を終へて　薪を焚いて軍服を乾し　寢る事さへ忘れて　今迄の苦労やこれから先の事など語り合ひました

話に依れば亭林鎮よりは巾四米の立派な道路があるといふのです

私達はそれを聞いて思はず歓声を挙げ　今迄の苦労を忘れた様に　明日からの楽しい

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

行軍を想像して寝に就きました
翌日　今日は立派な道路を行軍する事が出
来ると　嬉しさに胸を躍らして道路に來て
みればこれは如何に――
開いた口がふさがらぬとは此の事でせう
成程　幅員四米の道路があるにはあるが
それは今回の戰斗のため支那軍が急造した
軍道で　田圃の土を盛り上げたばかり
毎日降り続く雨と先を競ふ部隊に踏み荒さ
れ　道路と言ふよりも底知れぬ泥沼と言つ
た方が適当してゐます
それにいつの間に來たか他の大部隊が一杯
に溢れて犇き合つてゐます
馬が一歩ふみ入るれば　泥中に這入つてし
まつて脚は見へなくなつてしまひます
車輛はまるで泥の上に浮んでゐるやうです
泣き出しそうな号令――　馬を叱咤する声――
――喧々囂々たる有様です

これなら自分達の重車輛はとても通れそう
にありません　併し他に道はなし　どうし
てもこの道を通らねばなりません
隊長殿の命により附近の稲を刈り　午前中
かゝつて漸く一束ばかり敷く事が出來ました
これで先頭の三車輛はどうやら通る事
が出來たが　後が通れません
無理に通ろうとすれば馬は倒れ車輛ははま
る　一度はまりこめば附近のクリークの水
を汲んで來て馬の足の所を柔かにしてやら
なくてはならぬ　そうすれば後の車輛が通
れない　その中に馬は落鍬する　といふ様
な言語に絶する有様です
しかし何時までも　こうしてゐては前進出
來ない　一日も早く本隊に追及して南京攻
略に参加したい　気ばかりあせつて前進は
遅々として捗らない……
南京道こんな道路を行かねばならぬのか

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

と思ふと泣いても涙が出ない思です。
だが人力では致し方ありません
疲れた馬を励まし いたはつて進もうとしますけど仲々進めません
最後の方法として積荷を全部卸下し それを背負つて松蔭鎮迄運搬し 後の空車は各車輛の馬をつけて九輛の一個車輛 何と長い車輛でせう 駆者は全部向鉢巻で掛け声勇ましく前進を続けました
泥濘と豪雨の中を寒さに震へ殆んど眠ることもなく 一日一日と痩せ衰へる馬と共に難行を続け 亭林鎮を出発して八日目たつた二里の道を突破し漸く松蔭鎮に到着しました その嬉しさは筆舌に盡せません
私達は敵の一城を陥した様に万才を叫びました
その翌日
「後続部隊ハ一日モ早ク本隊ニ追及スベシ」
との命により 南京へ、南京へと夜も日もついで強行軍を続け 十二月十二日南京落城のその日無事に本隊に追及することが出來ました

犠牲的挺進

嘉興攻撃の想出

野砲六ノ五砲兵軍曹宮原義一

十一月五日 杭州湾に敵前上陸した我が師団の歩兵部隊が 同地の敵を追撃して殲滅的打撃を與へ 上海戦線敵の側背松江を屠り崑山に迫る頃 野砲部隊は金山衛城から松江に向って 道なき田圃の中を難行軍中でした
作業隊を編成して 前進路に逐次藁を敷き道路を補修しつゝ行くのですが 車輛は約

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

五〇粁内至七〇粁もあり、六昼夜で殲滅しても前進出来ず　前後軍を離脱して僅かで過半数を行軍すると言つた状態でした

この様な難行軍を

続けること四日　十四日漸く馮家橋渡河点に到着し　大隊主力に追及せんと準備中我が歩兵部隊は一挙に敵の據点を奪取したのでせう　無人の野を征くが如く戦果を拡張中の模様で　我が志垣中隊は松江を目前に控へ乍ら軍司令部の要員命令によつて渡河を中止し　其の日は同地に露営　友軍部隊の目覚しい戦果を聞いて　上陸以来未だ一度も敵に遭遇しない我等が髀肉を嘆するのも無理からぬ事でした

併し時は来ました

翌十五日我が野砲部隊は　第〇八師団の戦斗に参加を命ぜられました　我等は勇躍夜行軍で　食いや食はずで嘉興に向つて前進しました　橋梁も破壊され　本道上或は田圃の中には敵の遺棄死体が累々として横つてゐて　相当に激戦の跡が想像されます

道路の左右の田圃の中の小さい丘陵　それは悪く敵のトーチカです

第五中隊が嘉善を陥入れ嘉興に據れる敵を攻撃中の第〇〇師団の第一線に到着したのは十一月十七日一五三〇でした

戦砲隊は先行した挺進班の誘導に依つて陣地浸入した時は　既に觀砲間の連絡は終つてゐました

私共は嘉興東側を退却中の敵を発見　直ちにそを制圧して多大の損害を與へましたが

夜となつた

ので射撃を中止し　そこに陣地露営で夜を徹しました　雨は止みそうでありません

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

土堤の蔭に低く天幕を張つて寢てゐるのですが　彈丸は常に散列附近に無氣味な唸りをたてゝ飛來してゐます　砲の防楯にあたるのでせう　パン〳〵異樣な音がするが兵は數日の行軍と晝の戰斗の疲れでスー〳〵と安らかな寢息を立てゝ眠つてゐます

明く れば十八日　私共は早朝から請射墨準備で忙しかつた　前日來の雨も漸く晴れましたが　敵陣地一帶は

濃霧に鎖されて

觀測班の敵狀捜索も不可能です

敵は夜來頑強な陣地に據つて我に猛射を浴せてゐます

歩兵の攻墨も既に開始されてゐるのでせう

前線から後送されて來る負傷者をみても友軍の損害も又少くないらしい

昨日第一線に到着した○○師團の重砲が射墨を開始しました　霧の深いのに觀測が出來るのか　炸裂する音響を聞くと敵の第二三陣地を墨つてゐるらしいのです

○九○○頃　私共も霧の晴れるのを待つて射墨を開始しました　嘉興村落前端が敵トチカ破壞です

當時分隊長であつた私は中隊の右翼にあつて部下と共に　一發一中を期して射墨してゐました　敵の小銃彈は無氣味な音をたてゝ身辺をかすめる　友軍歩兵は正面から肉迫するのですが　前面の鉄道線路より一歩も出られません

出れば火を噴く

機銃の猛射をうけて　むざむざ犧牲を多くするのみです

前の斜面にへばりついて時機を見てゐるのでせう　友軍の銃声が疎に聞へます

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

我が歩砲連合の攻撃にも一本の橋梁を焼却し鉄橋は破壊し地の利を得てゐる敵は十重二十重の頑強な陣地に據って一歩も退きません その重火機は

益々猛威をふるひ

我に猛射を浴せます。

そこで聯隊長殿は（砲兵を敵前至近の処まで持って行って直接射撃に依って一挙に此の敵を屠ってやろう）と決心され我が志垣中隊に前進命令を下されました

中隊は一一〇五 射撃を中止し嘉興東端鉄道附近に陣地変換すべく急速な歩度で前進致しました

私は長途の轉戦で馬を失ひ支那馬に乗ってゐましたが相手がロバで軍馬と行動を同じく出来ません なんぼ鞭打っても歩度が遅く分隊の先頭を行かねばならない分隊長が鞭馬の間にはさまったり中馬の後についたり馬が云ふことを聞いてくれないのには苦労しました

敵弾は雨霰のやうに飛んで来ます

斜面の歩兵が

「危い 危い」

と叫んでゐましたが 先頭を行く畠中連隊殿もその後を行く私も

早く目的地まで

陣地を推進する事で無我夢中でした

鉄道線路の斜面にへばりついて時機をみてゐる歩兵部隊も声援を送ってゐました

中隊長殿は独断で畠中小隊の二ケ分隊を本一線歩兵大隊より更に前すへ猛進せしめ嘉興東方鉄道南側に陣地浸入を命ぜられま

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

した
前進路の橋梁が敵の爲燒却されて　これ以上前進出來なかつたのであります

田圃の中の一本道

その道路上の暴露した陣地です
全く無鉄砲な陣地浸入であつたかも知れません　けれどそれは頑強な陣地に倚れる敵を一擧に粉碎して　友軍歩兵の前進を容易ならしめようとする　犠牲的挺進でした
私の分隊は馬を解くと共に　先づ道路の右側の敵陣地に向つて火蓋を切つた
続いて村田分隊が陣地を占領して　道路の左側の敵陣地に猛襲を加へてゐます
中隊長殿は觀測小隊長小林少尉殿に私の分隊を　第二小隊長畠中准尉殿に村田分隊の指揮を命ぜられました

敵の重火器並に敵陣地の最重要據点に猛射を浴すれば　敵も又十字砲火浴せて抵抗します
敵前二百數十米の近距離で敵陣地が手に取るやうに見へます　敵中深く挺進してゐるので　敵彈は前後左右から落來します
今迄線路の後方で射撃してゐた吐谷分隊も又背力を以つて陣地を挺進し　右後方の敵を制圧　続いて輕裝甲車が一台來て　私共の陣地のすぐ傍で輕機を以て左側方より右後方にかけて掃射　我等も射つて〳〵射ちまくりました

交戰約一時間

一発心中　敵陣を粉碎して行く砲彈の雨で散兵壕に居たまらず　壕をとび出して逃れる敵兵の姿が肉眼でよく判ります

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

かくて我が歩兵の前進を不可能ならしめたさしもの敵し　我が砲兵中隊の枚膽なる行動と適切なる射撃によつて　總退却を開始しました

あの時の部下の行動を思ひ出時実に胸のすくやうな思がします

正確な砲手

の操作　彈下の敵者の彈薬補充

命中すれば

「やあ　命中だ！　命中だ！」

と　手を叩いて雀躍するその枚膽―

彈雨下に身をさらしながら　屯營の野外演習そのまゝの沈着なその行動―

これぞ忠君愛国の至誠より発する不屈熱血の結晶とも言ふべく又壯盛なる攻撃精神の精華ともいふべきであります

我等が鉄道線路を乗越へて歩兵大隊の第一線より

更に前方に

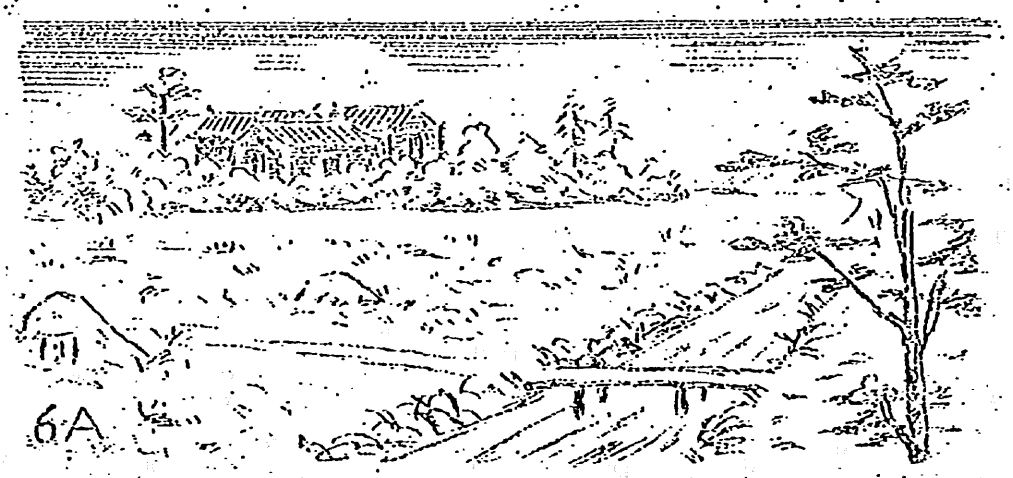
進出した時は　どうしたのか敵彈は疎になつてゐました

それは敵が出来得るだけ我等を引寄せておいて　殲滅的打撃を加へてやうとする術策であつたかも知れませんが　我が中隊の迅速な陣地浸入によつてその企圖は挫折されたのでした

敵が繁茂中の砲兵に集中射を浴せたなら自分達は相当の損害を蒙つた事でせう

かくて我が第一線の歩兵部隊は此の砲兵の火力の成果を利用して　速かに前進を起し敵を急追　その日の中に嘉興を占領する事が出来ました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



6A

泥濘の中の七時間

野砲六　本部
砲兵軍曹　中西健吾

野砲無線第二分隊は北野中尉殿指揮の下に師團司令部に配屬を命ぜられ　司令部と砲兵の連絡の任に當つてゐました

杭州湾上陸以來難路に疲れ果てた人馬は

クリークに悪逆様に墜落　無電機は故障を起し　砲兵の聯隊本部との連絡は全くとれなくなりました

仕方なく師團司令部と同行　前進を續けましたが　行けど〳〵道路はあく迄悪く　馬は全部落鉄予備鉄も予備の釘もなくなつてしまひ　遂には馬蹄は鉄損して北野中尉以下引馬の行軍です　金山迄行けば野砲の聯隊本部が居ると　疲れた足を引摺つて　やつと金山に着いてみれば既に出発した後です　皆今迄の張切つた氣持がグラ〳〵崩れて疲れが一度に出て　グタリなつてしま

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

びました

十一月二十日の一夜を秋雨降りそゝぐ金山の輜重隊の衛兵所に明かし　今日こそ　河鉾まで行けば聯隊本部に追及する事が出来ると　互に勵まし合つて雨の中を出発しました

十一月の雨を交へた風はゾク〳〵と冷く身に沈み相変らずの泥濘です　聯隊本部に到着する希望で　ともすれば沈み勝な氣を引立て〳〵進みました

南京へ急ぐ部隊は長蛇の如く續いてゐます　どの隊の者も泥まみれです

突然部隊が停止しました　前方から

「橋が破壊されて前進出来ない」

との遮停です　工兵がまだ到着してゐないので如何とも手がつけられないといふ　どれ位壊れてゐるのか以前の様であれば一時間もしたら補修が終るだらうと待つてゐると

一時間どころか　二時間三時間たつても部隊は依然として停止したまゝです　雨はまず〳〵降りしきる　じつくり濡れた軍服は吹きつける風で凍る様に冷い　足など千切れそうです　部隊の中に狹まれた私達は雨を避ける何物もなく泥濘の中にジヤブ〳〵と足踏を續けて暖をとりました

午後四時から十一時迄　寒氣に震へながら立續けました

到着した工兵隊に依つて橋の補修が終り前進を開始した時は涙の出る程うれしくありました

河鉾に到着した時は十二時を過ぎてゐました

その夜も聯隊本部は出発した後で　連絡をとる事は出来ませんでしたが　あの泥濘に立ちつゞけた寒かつた七時間の事を考へると　蘇生の思でした

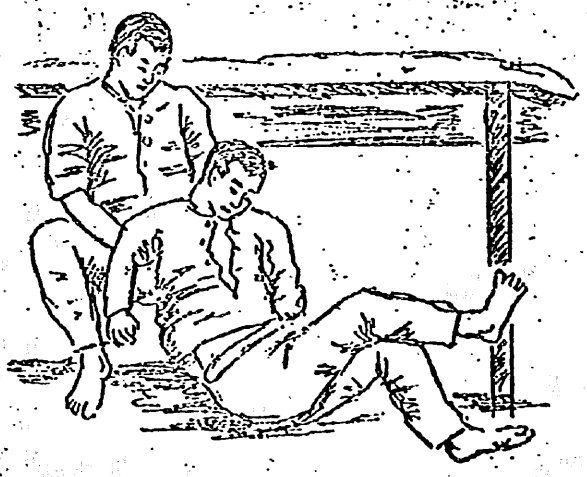
国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

燒煉瓦で腰を暖める

野砲 六ノ十二
砲兵上等兵　浜田之男

松江に着いた私達は　警官養成所と標札をかゝげてある立派な官舎に宿営しました
大隊主力の到着を待つ間　毎日人馬糧の徴発や　戦斗準備に日を送りました
或日　チャン酒を手に入れ　豚肉の御馳走で久しぶり　ほろ酔氣嫌になりました
上戸のN二等兵　余程飲んだとみえ　戦友達を困らしてゐましたが　やがて寝台の上にグウ〳〵ねこんでしまひました
私も心良い酔ひで　いつしか眠むってゐました　どれだけ時間が經ったか
「ドシーン」
と枕元で大きな音がしたので　びっくりして目をさましました

「ウーン〳〵」
と誰か唸ってゐます　とびおきて見るとN二等兵が高い寝台から落ちて　床に大の字になってゐます
其處此處で
クス〳〵
笑聲がしてゐます
兎に角寝台に直してやらなければ
と　起き上ってNを抱き
上げようとしたとたん　私の腰がギクリとして息苦しくなり　其の場にどッとへたばって仕舞ひました
Nを寝床に直そうとした私が　却って戦友



国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

に命拾をする事になりました

出征前 重荷を担いで腰を痛めたのが今出たのでせう

翌日 診斷を受けると 軍医殿が

「煉瓦を焼いて 腰をあたゝめろ」

と言はれましたので タオルに塩を拡げ焼けた煉瓦を包み それを外套で巻き腰に當てました 最初はポカ〳〵暖くて良い氣持でしたが時間が經つにつれてジリ〳〵あつくなって來ます

「何だ!!この位!! 戰爭だゾ ウーン」

と口の中で唸って我慢して居りましたが だん〳〵熱くなるばかりです

とう〳〵我慢しきれなくて そっと毛布の中から外套を引出して見ると 外套は赤い火を出し燃えてあます

「失敗だッ」

服を脱いで見ると 大きな穴が開いて 袴下迄焼けてゐます

すっかりあはてた私は 外套の火を素手で一生懸命にもみ消しました

直徑四、五寸もある焼穴のある外套を見る度にその時の事を思ひ出して一人微苦笑します

馬は次々に倒れた

野砲六ノ十二 砲兵軍曹 山本 爲雄

北支から中支に轉じて 十一月十七日上海に上陸し早速南京へ追尋しました 十七日間も船の中に押込められてゐた馬は 糧秣と運動不足のため瘠せ衰へ足は大きく腫れ上ってゐます 其の上私達の中隊は全部徵發馬で思小様に前進しません

十一月廿一日松江に着き ここで四日間滯

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

在しました既にこゝでは人馬糧共になく
全く徴発糧秣でした
二十五日出発　金山千米位前まで来ると
前馬が倒れてしまったので　仕方なく其處
に捨てゝ行軍を續け某部落に着き　米や大
豆等を徴発して元氣をつけ　一日滞在でし
たので一生懸命に馬の疲労を癒す様に努力
しました
二十九日出発しようとすると砲車の後複馬
が蹄葉炎で歩く事が出来ませんので　兵隊
を一人殘して二里位行ったでせうか又も一
頭倒れました　その時は分隊長も車長も徒
歩でした　豫備馬としては支那馬が二頭居
るきり　今後はその支那馬二頭が前駄馬で
す
馬糧は　大麥も高粱もなく徴発大豆ばかり
煮て食はしてゐましたので腹をこはして
又一頭死ました

私達は泣いても泣き切れぬ思でした　そし
て何故こんなに倒れるか不思議でたりませ
ん
北支では一度もこんな事のなかった私達の
分隊が　中支に来て何頭も續いて倒れると
は　残念でたまりません
よく考へて見ますと　北支で大麥疝痛が出
船の中でも一頭出ましたので恐れて減飼し
て居りました　それが第一の原因の様に思
はれました
それからは何でも食はす様に心掛けました
が既に遅れて駄目でした
其の頃は今の様に藁切もなく斧で藁を切り
翌日の分迄推行したり　藁を切ったり大豆
を煮たりして歳夜も寝ない事が度々ありま
した
馬がつかれすぐ倒れるので　砲手は自分の
米を二升も持って行軍したりしました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

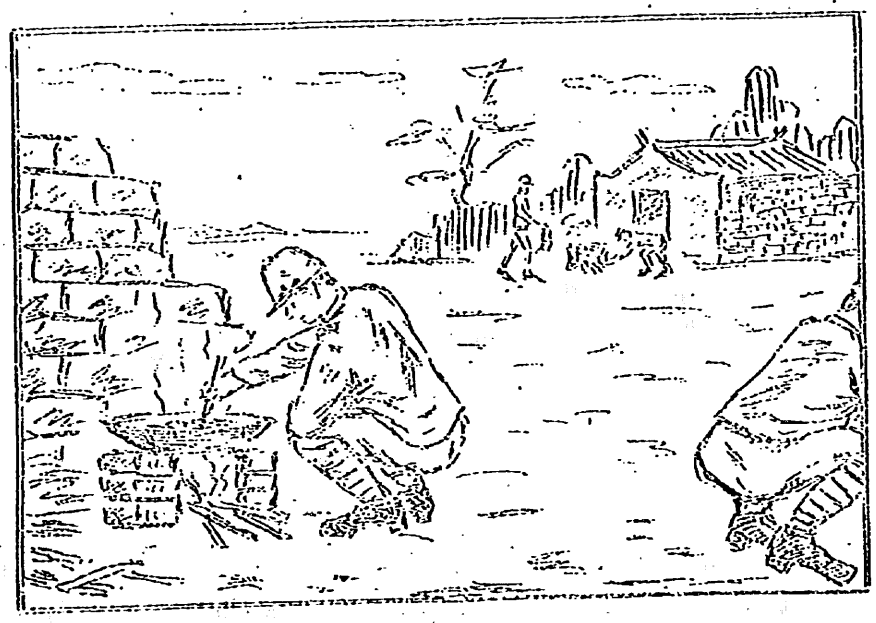
愈々行軍は急になり　毎日の様に馬が倒れ
ねても起きても唯　馬　馬　でした
この數日間の行軍に五頭も馬が倒れ　今思
ひ出しても涙が出る様です

愛馬に感謝

野砲　六ノ　第二中隊

金山衛城出発以後の道路の悪さは想像以上
でした
黄金の波打つ田は刈り取る人もなく　只彼
我人馬の踏にじるに委せてゐました　目的
地迄「後一里半だ」と聞かされた時は秋
空の雲は低く暮色迫る頃でした
夜に入ると共に雨が降り出し　只さへ濘る
道路は泥沼と化してしまひました　その中
を愛馬は克く後馬たるの任務を自覚して
鞍革も切れんばかり曳きますが泥濘にはま
り込んだ車輌は遅々として進みません　秋
風はヒシ〳〵と身に沁みる頃　全身より流
れる汗は瀧の様です
兵隊の口から　ともすれば
「前馬は曳くが　後馬が曳かぬから進まぬ
のだ」
等と愚痴が出るが　愛馬は黙々として　疲
れた体を　主人の命ずるまゝに動かしました
そしてついにあの難路を征服してくれま
した　自分達が如何に頑張っても馬が居な
しては如何ともする事が出来ないのです
それを考へる時　自分達は愛馬に深甚の感
謝を捧げねばなりません
自分達は難行軍のある度に馬の尻に鞭を當
てました　そんな事を考へると馬に済まな
い氣持で一杯です　（獣医部　提供）

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



知らぬが佛

歩四五　新里中尉

中支に轉戰して間もなくでした
部隊が「立派なお櫃がありました」と持って來ました　みんな内地を出てから久し振りのお櫃だといふので　飯を入れて大喜びで食べましたものゝ　後で分つたのですが　なんと支那人の便器でありました
水がありませんので　屍体の浮いたのを堰きわけて米を洗ひ　飯を炊いたりしました
行軍して行けば　自動車　戰車　車輛　人馬の屍体道を埋めつくし　或フリークなど屍体で埋つてゐる所もありました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

分隊長の遺志を継いで

歩四五ノ五ノ四　高田伍長

青浦を出てから山口村を通過して　二時間程行つた時敵に遭遇しました　それで此處に三日宿泊して前進しようとする時の事であります　或中隊の遺骨が参りましたので名前を訊いて見ますと　『遠藤伍長』だと言ひます　私と同村出身の遠藤です　遂い三四日前會つて　種々と面白い話をして別れたのでした　何とも云へない感じが体中を駆け巡る様な気がしました

『戦死の模様を語して呉れ』と申しますと分隊の者が涙を浮べて

『敵がムクムクと　部隊も仲々前進出來なかつた　遠藤分隊長はそんな中を一人どんどん進撃して行く　私達もそれに続いた　敵は我分隊に集中火を浴せました　先頭の分隊長がパッタリ倒れられた　『伏臥つた』と思ふと又起き上つて　『進め進め』と叫ばれたが少し前進して又倒れられた　すでに身に三発の弾をうけてゐられるのでした　気丈な分隊長も遂いに力盡きて動けなくなりました

『後は頼むぞ　しっかりやつて呉れ』と繰返し言われました　軍歌も歌われました

『天皇陛下萬歳』を奉唱してこときれました

自分達は火葬して　今から中隊に追及するところです』

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

と　話して呉れました

同村の親しい友遠藤伍長の華々しい奮戦は私に無言の鞭を與へます

（よし　俺もきっと負けない様に働く　後から行くぞ）

と遠藤の靈に誓ひました

これは後からの話ですが　遠藤に一番可愛がられた當時の初年兵の福重伸一一等兵は分隊長のこの壯烈な戰死に直面して非常に感激し（よし分隊長殿の遺志は自分が継ぐ）と　決心したそうです　そして進んで下士志願をして教育もうけたのですが　残念乍ら各奉攻勢の時大沙坪で華々しい戰死を遂げました

「御苦勞！御苦勞！」

……歩四五一四　座談会……

南瀛大尉

天文台で初めて師團長閣下に拝謁ひしました　その時閣下は

「御苦勞！　御苦勞」

と仰言られ　めがねの片方の弦を直でくくって　小さな支那馬にお乘りになって居られました　旅團長閣下は杖をついてテクテク歩いて居られました

小野上等兵

蘇州河で敵と相対時してゐる時　頑強に抵抗する敵は一歩も退きません　その時　雲間より勇ましい爆音を立てて飛來した友軍の海軍機が　グッと機首を下げたかと思ふと鮮やかなダイヴィング！　黒い物が三ツ――四ツ　敵陣地真只中に落ちて行く　猛烈な爆音がして人馬車輛等々　空中高

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

く吹き上げられる様は実に痛快でありました　任務を終へた飛行機が基地指して一段一段小さくなつて行く頼母しい後姿を　何時迄も見守つてゐました

併し敵は今の爆撃にひるまず　南友軍に集中火を浴せます　敵との距離二百五十米

砲の来援を頼りに待つてゐますと　歩十三聯隊の大隊砲がやつと来て呉れ　川向ふの敵に一発必中といふ砲撃の御馳走を叩きつけ　全く胸のすく思いが致しました

東軍曹

私は分隊長代理をして居ました　自分の小隊が尖兵で　おまけに私の分隊は路上斥候で一番先頭を進んでゐました

墓地に上衣を脱して休んでゐると　前方に二・三名の人影が見えます

土民かなと見て居ると誰かが　「敵だ」といふ　すると向ふで手拭を振つて招く

近寄ると危険だと注意して尚よく見てゐる中に姿を隠してしまひました

少し近接して見ると　銃眼らしいのが見へます　敵の陣地だ

一名を報告にやり　攻撃の態勢をとつてゐると早速猛烈な手工業機銃の集中火を浴せて来ました

何等遮蔽物もないので　射撃の合間を利用して傍らの台地にとりつき　攻撃致しました

小野上等兵

休憩してゐると　第三中隊が警備してゐる段山鎮分哨に射撃をうけた敵が逃げて来たので　これを射つが當らない

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

それで迂回してかくれておますと三名の中
國兵さん一生懸命逃げて來ます
五十米位の所まで近寄つた時　跳び出して
襟首を掴んで三名共捕虜にしました
この時茶園上等兵は　一人離れて行く処に
築山のかげにかゞ〳〵音がする　安全裝置
を外して射たうとすると　敵に射たれて左
手に負傷をしました　そのまゝ突込んで行
きますと　敵の奴その銃を握つて離しません
左手をブラ〳〵したまゝ取組んでおます
この騒動の茶園の声を聞いて駆けつけ
そ奴を捕へるのに應援しておますと　何
時の間にか三名の捕虜の奴居なくなつて居
りました

行軍と雑

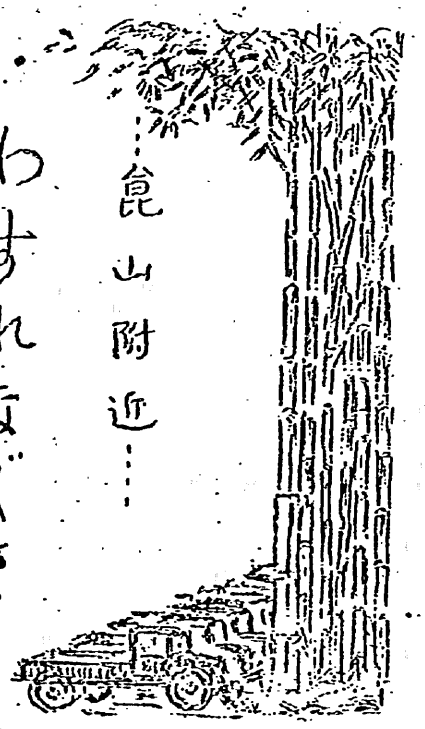
歩四五ノ一〇　歩兵上等兵　東中川操

十一月とは謂へ江蘇省の残暑は炎熱厳しく
て汗だく〳〵　敗残兵は至る所に出没し
ゲリラ戦術を以て我等の進軍を阻もうとし
ております
我が部隊は　山野を壓して崑山へ―崑山
へと進んで行きます　果しなき廣野を前進
する銃の波　コツ〳〵と皇軍の響―　道
の両側の田圃に實つてゐる稲穂は　重たさ
うにその日を浴びて頭を垂れております
今夜の宿營地は　後何里位かしら　雞は居る
だろうか　なぞと考へ乍ら前進を續けるの
でした

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

やがて小部落に着き　兵器の手入も終る頃
鶏の鳴き声が近くに聞へます
早速分隊からは　足の痛さも忘れて雞捕へ
に走って行きます　暫くすると五六羽捕へ
て来ました　後に残った飯炊き準備の戦友
も喜こんで一緒に料理して　分隊全員円を
描いて一日の行軍の疲れも忘れ　雞の御馳
走で元気を回復し朗らかになります
大陸の夜は静かに更けて　時々銃声が何処
からとも遠く聞こえて来ます
翌日も亦暁を衝いて追撃行軍が始まりまし
た　今日は何処まで歩くやら　と　思ひつ
つ　ふと彼方に自動車の轉覆したのを見受
けました　段々近付くと敵の屍体　砲　自
動車が破壊され　道路上に市場と工場と合
併したかのやうになってゐるのを見ました
　　幾々の進撃を阻まうとした敵の此の無惨
な有様をみて　これでも抗日の迷夢が覚め
ぬのかと不思議な思ひが致しました
見小附近の鉄道線まで来ますと　急に敵の
射撃をうけ　弾丸は頭上をシユン〜と激
しく飛んで来ます
中隊はすぐ左に迂回して敵の側背を衝き
之を難なく撃退致しました
その途中　久し振りに我々の聯隊長殿の御
元気な姿に接し得まして　亦私共の意気も
上りました
尚一時間位行きますと前の部落から又射ち
出して来ましたので　薄暮を利用して攻撃
すれば敵は一溜りもなく敗退したので　先
遣敵が這入ってゐた家に宿営しました
降り出した雨の中で僅かな米でどうにか腹
をみたす事が出来ました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp



崑山附近……
わすれなぐさ

歩四五ノ六　後藤軍曹

◇

支那と云へば　自動車など数のしれたものだろうと思つてゐましたところ　金山の竹藪の所に多数のバスがありました
あきれて試みに数へてみましたが　ほんのしばらくの間に二百八十台を数へました

目をしろくろして暫し呆然といふ態でありました

◇

崑山道路前進中は　路傍に敵屍体がとても多かつたが　疲れ果てゝはそれもかまはず屍を枕にせんばかりにして寝ました
又屍体の中に一少年がありました　色白いその面差しは　出征の際手を握つて別れた弟そつくりです　思はず抱き上げてみましたが　冷たくなつてゐました
若し生きてゐる者ならば　一日でもいゝから連れて歩き可愛がつてやるのでしたが……

◇

歩四五ノ六　瀬崎上等兵

崑山行軍の折　兎を食ひました

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp

米は無いし　何かないものかと探しに行きますと　二間程前に猫らしいものが居ます
よく見ますと耳が長い　いきなり飛びついて耳をつかまへてみると　それは野兎でした　内地の兎に変らず　とてもうまく食べました

◇

歩四五ノ六　後藤軍曹

崑山西南方での事です
私はチエッコ分隊でありました
射撃した後「あたった！　あたった！」と頭を出して喜こんでおましたところ　側方から敵が狙撃して来ました
分隊長にはミリクリに叱られ（え、くそ！）
勝手にしやがれ）と　癪に障って投げやり
廣い様な気持で三時間も寝ておたでせうか

しかしよく考へてみれば叱られるのも當然の事　自分の身の爲言はれたことと　考へなほしました
実は分隊長に助けられた訳なのですが　あの時はムシヤクシヤに腹を立てゝおましたほんとうに今考へても申訳ない事と憶じておます

……

ロ

歩四五・六　いづみ

星空に在りし日の戦友微笑みて
我をはげます心地するかも

ロ

歩四五ノ六　下園

魂のよみがへりくる心地して
戦友のなきがら　強く揺りぬ

国立公文書館 アジア歴史資料センター
Japan Center for Asian Historical Records
http://www.jacar.go.jp